

発行：宮城県仙台農業改良普及センター（仙台地方振興事務所農業振興部）

〒981-8505 仙台市青葉区堤通雨宮町4番17号

TEL 022-275-8320（地域農業班）

022-275-8410（先進技術第一班）

022-275-8374（先進技術第二班）

FAX 022-275-0296（共通）

E-mail sdnokai@pref.miyagi.lg.jp

URL <http://www.pref.miyagi.jp/site/sdnk/> →



普及センター活動紹介

令和2年度宮城県農林産物品評会・花き品評会

■新規就農者に対する栽培管理指導

コロナ禍での新たな普及の取組み

実りの秋を迎え、収穫を終えたほ場を見ると、昨年の令和元年東日本台風による災害の状況が思い起こされ、特に感慨深いものがあります。今年はいえ、新型コロナウイルスによる感染拡大の収束が一向に見えず、農業経営への影響が少なからず生じているところです。

コロナ禍において普及センターは、外出自粛要請により農家への巡回指導や研修会等の開催ができませんでした。このような中で、農家から栽培時期ごとの指導やアドバイスを求められたことがきっかけとなり、新たな手法としてWebを活用したりリモート勉強会を開催しました。Webは、普及センターと農業者、試験研究機関あるいは複数の経営体を同時に繋ぐことで、離れていても情報交

換を行うことができ、新たな活動手法として期待されます。今後はこうした手法も活用しながら、状況に応じた最適な指導活動を展開して参ります。

また、現在、県では「みやぎ食と農の県民条例」に基づいた第3期計画を策定中です。令和3年度から10年間の基本的な計画であり、人口減少や高齢化が進む中、農業者のみならず消費者も含めた「豊かなみやぎの食と農」を展開していく内容となっています。普及センターではコロナ後の新しい時代を見据え、これからの農業展望や多様な担い手の育成など新たな視点での普及活動に取り組んでいきたいと考えています。

農業普及指導専門監 泉澤弘子

普及センター活動紹介

仙台農業士会の研修会が開催されました

令和2年8月28日に令和2年度仙台農業士会第1回研修会として、東日本大震災で被災した地域において、経営規模や販売方法が異なる2つの経営体の視察を行いました。

最初の視察先である高山真里子氏は、多品目の野菜等を栽培し、労働力が1人であることを補うため、生産物をシェフ等に直接ほ場まで取りに来てもらうなどユニークな経営を行っています。高山氏から、「楽しみながら農業を行うことがモットーです」との説明を受けました。



次に、東日本大震災後に設立され、大規模園芸施設で水耕栽培を行っている(株)みちさきを視察しました。代表の菊地守氏から、「販売先で何が求められているかを考え、露地栽培では作れないものを意識して作付けする」など、水耕栽培のメリットを活かした経営について説明を受けました。この研修会を通じ、農業士同士の親睦を深めることができました。



ご紹介いたします ～新指導農業士～

高山真里子氏 (仙台市 野菜)

高山真里子氏は、仙台市内で飲食店や直売所等の実需者のニーズに応じた野菜の少量多品目栽培を行っている園芸農家です。また、農林水産省の農業女子プロジェクトのメンバーとして、さらに仙台市の若手女性農業者グループ『フェミリエ仙台』の代表を務めるなど、女性農業者の牽引役として活躍しています。



～令和2年度宮城県農林産物品評会・花き品評会～ 入賞おめでとうございます！



ピオラ (佐藤清敬さん)



トマト ((有)サンフレッシュ松島)

10月21～23日、令和2年度宮城県農林産物品評会と花き品評会が開催されました。今年はコロナ禍で例年とは異なる状況の中での開催となりましたが、県内各地域から品質の高い農林産物・花きが323点(林産物除く)出品されました。うち当普及センター管内からは34点の出品があり、次の方々が入賞されました。おめでとうございます。

	受賞名	受賞者氏名 (敬称略)	市町村	品目
農林産物品評会	宮城県知事賞 (2等) 宮城県園芸協会会長理事賞	(有)サンフレッシュ松島	松島町	トマト
	宮城県知事賞 (3等)	瀬戸 善春	大和町	ぶどう
	宮城県知事賞 (3等)	佐藤 純子	大和町	ねぎ
花き品評会	宮城県花と緑普及促進協議会会長賞・金賞	佐藤 清敬	仙台市	ピオラ
	宮城県花と緑普及促進協議会会長賞・銀賞	横田 清孝	仙台市	小輪パンジー
	宮城県花と緑普及促進協議会会長賞・銀賞	加藤 浩幸	仙台市	パンジー

日本なし産地を次世代に継ぐための支援活動を行っています (対象：JA仙台利府梨部会)

利府町では、生産者の高齢化により、日本なしの生産者数と栽培面積が急激に減少しており、産地の維持のため生産意欲の高い担い手の確保・育成が課題となっています。

普及センターでは昨年度、利府町及びJA仙台と協力し、JA仙台利府梨部会の全会員に対し、経営の現状と今後の産地の展望について、聞き取り調査を行いました。その結果から次世代の担い手となる若手生産者や後継者をリストアップし、部会及び関係機関で連携して重点的に支援を行うため、次の3つの活動を実施しています。

① 意見交換会の開催 (7月28日)

利府梨部会のベテラン生産者、若手生産者、関係機関が集まり、梨産地の活性化に向けた意見交換会が開催されました。

普及センターからは聞き取り調査の結果とそこから見えた産地の課題について報告し、解決に向けた提案を行いました。参加した生産者からは、提案に対して様々な意見が出され、次のステップとして、将来の担い手の育成と法人化を検討するため、研修会を部会として取り組むことになりました。



② 若手生産者相互視察研修会の開催(8月23日)

次代を担う後継者育成のため、部会及びJA仙台と協力して初の「若手生産者相互視察研修会」が開催されました。

多くの若手生産者が参加し、このうち3名の園地を視察しました。園主の若手生産者から経営概要、栽培管理のポイント、今後の経営方針について説明をいただいた後、活発な意見交換がなされ、活気のある研修会となりました。また、次回の研修会開催を希望する声が多く、2回目を開催する予定です。



③ 産地の技術の浸透化 (技術情報誌の配布)

産地には指導的ベテラン生産者の方々がおり、その方々の技術を産地で共有化することで生産力



ベテラン生産者のひとり、引地俊彦さんの園地で、摘果や新梢管理について教えていただきました。

の向上を支援しています。

普及センターでは、これまで産地で培われてきた技術を取り入れた技術情報誌を作成し、定期的に配布することで産地への技術の浸透を図りました。若手生産者からは「これまで産地の栽培技術についてまとめたものがなかったので、技術の確認に役立つ」という声をいただいています。

普及センターでは、今後も部会や関係機関と連携し、産地の次代を担う後継者のネットワーク強化を図り、若い日本なし農家の育成を継続的に支援していきます。

経営承継勉強会で引き継ぐべき目に見えない財産を確認 (対象：みどりあーと山崎(株))

普及センターでは、大郷町で水稻と大豆を約100ha栽培し、概ね3年後を目途に経営承継を計画しているみどりあーと山崎(株)を対象に、(公財)みやぎ産業振興機構の事業を活用した経営承継勉強会(全5回)を開催しています。

第1回(6月22日)と第2回(9月7日)は、クジライコンサルティング代表の鯨井文太郎講師から、「経営承継では、目に見える財産だけでなく、会社がこれまで培ってきた栽培のノウハウなど目に見えない財産の引き継ぎが重要」と説明され、参加した役員及び社員が水稻や大豆の生産工程毎に工夫していることやこだわっていること、他社より優れていること等について付箋に書き出して模造紙に貼り付け、それを可能にしている理由や秘訣について話し合いがなされました。

役員からは、会社設立までの経緯や苦労話も出され、若手社員からは「どういう想いで会社を作り、今までやってきたかがわかった」「会社を継承することの重要性がわかり、有意義な勉強会になった」との感想が聞かれるなど、数々の目に見えない財産の確認が行われました。

第3回は、経営の状況と課題の見える化を行い、第4回から経営承継計画の作成に着手し、第5回で経営承継計画をまとめ上げる予定です。



Webを活用した新しい普及活動始めました（リモート勉強会）

普及センターでは、新型コロナウイルス感染症拡大防止対策の一環として、Webを活用した新しい普及活動を始めました。

これまでに3回、タブレット端末で複数の拠点（複数の農業法人、県庁、農業・園芸総合研究所、普及センター）を結び、栽培管理に関するリモート勉強会を開催しました。これまで通りの現地指導とリモート方式による指導を状況に応じて使い分けることにより、普及活動の質を落とすことなく移動時間の短縮を図ることが可能になりました。

リモート勉強会に参加した生産者からは、「移動時間がない分、管理作業の時間が増えるので良い」「やはり実際に会って話したい」など、様々な意見が聞かれましたが、リモートによる普及活動に関しては「今後、必要だと思う」という意見が共通して聞かれました。今後も、現地指導

とリモートによる指導のメリット、デメリットを見極めながら、より効果的、効率的な普及活動を行っていきます。



Web上での指導の様子。音声の他、参加者の様子も伝わる。

えだまめ栽培における作期拡大の可能性について調査しています

仙台市の中田地区や六郷地区は本県のえだまめの主産地であり、個別農家の他、農業法人においても栽培されています。近年は機械化が進み、大面積での栽培が可能になっています。しかし、収穫適期が短く、選別に労力を要することから作期の拡大が課題となっています。

普及センターでは、普及指導員の調査研究として、昨年度から農業法人の現地ほ場において、えだまめ栽培の作期拡大に関する課題に取り組んで

います。昨年度はマルチフィルムや不織布利用の他、直播・移植の別による早期出荷作型の検討を行いました。調査の結果、移植区が8～13日程度、他区より早期に収穫期に達し、特に「移植・黒マルチ区」が収量及び品質が高かったため、有望な作型と思われました。

本年度は、早生系品種を利用した夏播種・秋穫り栽培の可能性について継続して調査を行っています。



「早期出荷作型検討(R元)」試験区



「早期出荷作型検討(R元)」現地検討会



「夏播種・秋穫り作型検討(R2)」試験区

トピックス

中山間地域で賑わいのある農業を実践しています ((株)みらいファームやまと)

(株)みらいファームやまとは、大和町吉田地区に宮城県最大規模となる3.3haのぶどう畑とともにワイナリー（了美ヴィンヤード・アンド・ワイ

ナリー）を整備し、栽培から醸造まで一貫した県産ワインの生産に取り組んでいます。また、令和2年4月には、交流人口を増やし地域を活性化させたいとの思いから、ワイナリーの敷地内にレストランをオープンしました。

レストランでは、大和町のシンボルである「七ツ森」とワイン畑を見ながら、県産食材を使った料理とワインのペアリングを楽しむことができ、「宮城の新たな魅力」として話題になっています。

